4 月 24 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　20：　19－31

「見ないのに信じる人は、幸いである」

イエスの復活を直接目撃したマグダラのマリアのように、神の栄光を見ることは、信仰生活の上で大きな助けとなるでしょう。たとえ暗闇の中だとしても、必ず光が差すことを確信できるからです。また、「今は時ではない」と待つことができるからです。しかし、「見る」ことは諸刃の剣でもあります。なまじ「見えてしまう」がゆえに、不安に陥ることもあるからです。

40 年の間、荒野を旅したイスラエルの民は、いよいよ約束の地カナンに近づきました。モーセは主の言葉に従って、民の代表者を偵察に行かせます(「人を遣わして、わたしがイスラエルの人々に与えようとしているカナンの土地を偵察させなさい。」民数記 13:2)。偵察に行った人たちは、モーセの元に帰ってきて、そこが乳と蜜の流れる地であることを報告します(「彼らはモーセに説明して言った。『……そこは乳と蜜の流れる所でした。』」民数記 13:27)。この報告はイスラエルの人々を喜ばせました。

しかし同時に、偵察に行った者たちは、その土地の住民の強さを見てしまいました(「しかし、その土地の住民は強く、町という町は城壁に囲まれ、……」民数記 13:28)。気後れした彼らは、「我々が見たのは巨人だった」(民数記 13:32)と、実際に見てもいないものを見たかのように吹聴して、イスラエルの士気を下げようとします。「見てしまった」がために、神の言葉、神の思いに逆らう選択肢をとろうとしてしまうのです。

復活のイエスが弟子たちに現れた時、トマスはその場に共にいませんでした。そのトマスが「自分の目で見るまでは信じない」(ヨハネによる福音書 20:25)と言ったのは、やはり「自分の思う信仰」から逃れられない姿を示しているでしょう。イエスが復活されたという事実よりも自分の確認が先に立っています。

もちろん、栄光を直接見ることができるならば、見るに越したことはありません。しかし、「直接見る」ことにこだわるあまり、信仰の本筋、本質から外れていくこともあり得ます。イエスがトマスの前に立たれたのは、もう一度、信仰者の道へと連れ戻すためです。

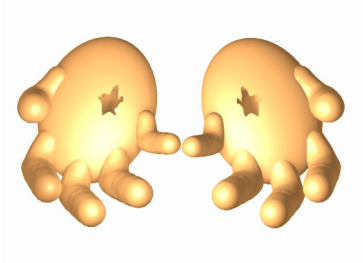
「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」(ヨハネによる福音書 20:27)

イエスが望んでおられるのは、全ての者が神を信じることです(「主よ、造られたものがすべて、あなたに感謝し／あなたの慈しみに生きる人があなたをたたえ」詩編 145:10)。全ての者がその信仰を力強く告白することです(「あなたの主権の栄光を告げ／力強い御業について語りますように。」詩編 145:11)。「直接見る」ことがその一助となるならば、イエスは喜んでその姿を見せられるでしょう。しかし、むしろ足を引っ張ることになるならば、イエスは陰からそっと見守ってくださるでしょう。

私たちが「見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ」(「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」コリントの信徒への手紙二 4:18)のは、「見える」ものにはどうしても主観が入ってしまうからです。永遠に続く大切なもの、神の愛を見失わせてしまうからです。

仮に、神の栄光を直接目撃したことがなくても、聖書を通して、また先達たちの言葉と思いを通して、私たちはそれが永遠に存続していることを知っています。

「見ないのに信じる人は幸いである」(ヨハネによる福音書 20:29)



もちろんこれはトマスを叱責する言葉ではありません。厳しい現実の中で神を、イエスの復活を信じる私たちに、イエスは今日もねぎらいの言葉をかけてくださっているのです。